

# 堀川

かくれ  
産業・土木  
遺産

## 尾張藩主の花見所 水主町発電所

文化年間(1804～18)に、御普請奉行の堀彌九郎が洲崎神社付近から日置橋先までの南北数百mに数百株の桜と桃を植えた。やがて見事な花が咲き、堀川沿いが花見の名所となり、ついに藩主花見所も設けられた。明治22年、名古屋電燈が今の電気文化会館の地に名古屋初の発電所を稼働させた。名古屋の街に電灯の明かりが広がっていく。明治27年には複雑な事情のもと愛知電燈ができ、下広井町に発電所(現:中部電力中村電力センター)が造られ、競争激化で共倒れの危機に直面した。県市などが仲介して明治29年に統合され、第2発電所となる。直流遠距離送電はロスが大きく、第2発電所の交流発電機が遠距離送電に向くため、熱田方面はこちらが利用された。さらに需要増加と規模拡大のため交流発電・送電が計画され、燃料の石炭運搬に有利な堀川沿いで、明治34年、藩主の花見所跡地に3番目の本格的な火力発電所が作られた。水主町発電所である。

南長島町発電所	明治22～37年	直流	250V	250kW/h
第2発電所	明治27～37年	直流		110kW/h
		交流	600灯用1台	

水主町発電所 明治34～大正3年 交流 2300V 1100kW/h  
と約3倍の能力で本社も移転、南長島町発電所と第2発電所は休止した。やがて発電は水力が主力となり、この発電所も大正3年に役割を終え、現在は中部電力水主町変電所になっている。その近くに当時の排



▲ 水主町発電所排水路遺構

◀ 名古屋電燈 水主町発電所  
愛知県写真帖

水路の貴重な遺構が見られるが、それも消え去る運命のようだ。

# 堀川

かくれ  
産業・土木  
遺産

## 明治初期の擬宝珠 日置橋



明治14年の擬宝珠が親柱に冠る日置橋

日置橋は堀川開削当時の「堀川七橋」の一つである。ここは名古屋城下の町はずれ日置村だ。大身の武士の下屋敷や足軽屋敷があり、南寺町に近く便も良い土地なので後には町奉行所の支配に入った。現在の日置橋は黄色い欄干の歩道橋が目につくが、中央の車道橋は古い和風の橋で風情がある。親柱は石で、不思議なことに二つの年号が彫られている。「明治十四年」と「昭和十三年」だ。そして擬宝珠をかぶっている。古色蒼然として錆や傷も多く、文字が一杯に刻まれている。ほとんどは、明治14年の改築に資金を寄付した人たちの名である。最後に「百折一道達三重縣 寶珠之光萬世不變 森邨宜民撰」とある。折れ曲がりながらも遠く三重県に続く大切な道。その道に架かる橋の架け替えに協力した人の心意気を称え、末代まで橋が役立ち人々の功が伝えられることを祈念する気持がこもった言葉だ。撰者の森邨(村) 宜民は、尾張藩の漢学者で明治2年に明倫堂の漢学一等助教となり、のちに愛知県中学校(現:旭丘高校)の先生を務めた。東区に森村記念館がある。日置橋の擬宝珠は、寄付者の名と当代一流の学者の撰文を刻んだ貴重なものだ。だからこそ、濃尾大震災(明治24年)後と昭和の改築で親柱と擬宝珠がそのまま残され、二つの年号を刻んで今に伝わっているのだ。日置橋は、平成23年に認定地域建造物資産に指定されている。

建設	旧橋: 明治14年9月	前橋: 濃尾地震(明治24年)後
	現橋: 昭和13年9月	
所在地	名古屋市中区松原二丁目	管理者 名古屋市
規模	旧橋: 長さ21.6m 幅4.2m	前橋: 長さ22m 幅6m
	現橋: 長さ21.6m 幅8.4m	